

# 令和6年度 日本大学明誠高等学校 自己評価票

## 〔本校の目指す学校像〕

日本大学の「目的及び使命」にのっとり、明き、浄き、直き、誠の心をもつ、徳性豊かな人格の完成に努める。知性を高め、学問への情熱を養い、個性に応じた能力を最大限までに伸ばさせ、自主性を確立し、相互の信頼と敬愛とにより、協同調和の精神を養い、社会の良き一員たる人材を養成する学校を目指す。

## 〔本校の特徴〕

希望する生徒全員を日本大学及び難関国公立・私立大学へ進学させることを目標にしながらも、勉学だけでなく、学校行事・部活動にも積極的に参加させることにより、有意義な高校生活を生徒に与え、将来、社会に貢献できる人材になり得るため、高校生としての基本的な生活習慣、知識及び向上心の修得を目指す。また、自然豊かな環境の中で充実した学園生活を過ごすことを通して、人間力の育成を行っている。

具体的には、各教科シラバスを作り、明確な指導目標を設定し指導の充実を常に図りながら、個々の生徒に注目し、生徒一人一人の学力向上を狙っている。また、文化祭でのクラスパフォーマンスや芸術鑑賞教室等を開催するなど情操教育も重視している。さらには、年間を通じて立門指導、通学路での登下校指導、校内巡回指導、公共交通機関内での巡回指導に学校全体で取り組み、生徒の基本的な生活習慣の確立とマナーの向上、協同調和の精神が養えるように、教職員が一丸となって、教育活動及び学校運営に取り組んでいる。

## 〔令和6年度の重点目標〕

①新しい教育活動の創造、②教職員が一体感をもった生徒の人間力の育成、③各種行事を通して、生徒が自ら考え行動することを促す、④外部評価を高めるように努める。

新校舎完成を最終目標とし、10年前に始めた学校改革が新校舎の完成により一つの区切りを迎える。そして現在、日本大学の事業として進めている大規模事業計画が、令和7年度末には完成を迎える。令和6年度は、「新しい日本大学明誠高等学校の創造」に向けて、文字どおり新しい環境の中で、本校の新しい教育活動を創造する年としなければならない。

学校改革の中で掲げられた「人間力の育成」は、「一人ひとりが文武両道」という形で既に表れているが、令和6年度においても引き続き、生徒育成の柱となる。しかし、令和7年度までの間において校内整備のための工事が行われることから、教育活動がスムーズに行えるように、教職員全体が、本校の特徴でもある「学校全体が一体感」を持って物事に当たる必要が更に求められている。

令和6年度においても生徒自身の行動を促す指導を引き続き行うことで、生徒が自分ごととして学校生活を受け止め、勉強はもとより、部活動、委員会活動等の充実を推し進めることが必要である。そのような生徒会活動の結果として、文化祭、体育祭、アカデミア明誠などの大型行事の充実と併せて、生徒が試行錯誤を通じて得る経験を基に、引き続き「生徒が成長する学校」であり続けることが求められている。

新校舎における新しいICT教育環境を活用した学習指導により、なお一層の学力向上を目指すことは学校改革の目標の一つであるが、令和6年度は、特にICT機器の活用をより具体化することが求められている。確かな学力に基づく高い進学率は本校の特徴であるが、本校が日本大学の附属高校として確固たる地位を築くことで、これまで以上に地域や社会から評価される高校となることは、これからの日大明誠高校のあるべき姿でもある。在校生及びその保護者からの評価に加えて外部からの評価を得ることで、引き続き安定した生徒数確保を実現し、財政基盤の確立を目指す必要がある。

〔令和6年度の自己点検・評価結果〕

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和7年度取組方策 (Action)
教育活動	新学習指導要領を踏まえた上での授業・評価の改善	令和6年度の新学習指導要領全学年導入に伴い、学習指導内容を見直し、令和7年度に向けてより効果的なカリキュラムの再編成を行うとともに、総合的な探究の時間を充実させ、生徒の学びを深める取組を進めた。	A	令和7年度入学生より、教育効果向上を目指して教育課程を変更する。複数の科目の単位数を見直し、「日本大学の基礎学力到達度テスト」で高得点を目指せるカリキュラムを導入する。また、総合的な探究の時間を土曜日から平日の時間割に組み込むことで、土曜日の部活動大会参加による弊害を解消し、生徒が授業に集中できる環境を整える。
	生徒による授業評価アンケート結果に基づく授業改善	生徒による授業評価アンケート結果を基に各教員は授業の自己改善に努めるとともに、授業内容や指導方法に問題が報告された場合は管理職が内容を確認し、授業改善を促した。	A	各教員がアンケート結果を真摯に受け止め、自身の指導における改善点を見直し、授業内容や指導方法の向上に努める。引き続き、教員と管理職がアンケート結果を基に面談を通して、授業の効果的な改善策を考え、生徒の学びの質向上を目指す。
	高大接続改革への対応	各教科で「知識・技能」の習得を重視しつつ、それを活用する「思考力・判断力・表現力」を高めるアクティブ・ラーニング型授業（ディスカッションやプレゼンテーション）を行った。また、各教科で「主体的に学ぶ態度」を評価する観点を明確化し、シラバスに評価基準を示して運用した。その上で、学年末の成績表には観点別評価を記載することで、令和7年度への取組の参考とさせた。	A	令和7年度入学生より新カリキュラムを導入し、各教科での「知識の活用」を意識した学びの深化を促進する。評価方法を充実させ、思考力・判断力・表現力を測る課題や試験を充実させる。生徒の学習プロセスを可視化し、生徒の主体性を育む環境を整えるため、ディスカッションや発表の機会を増やして表現力を強化する。 新校舎となり通信環境が向上したため、ICTを活用してアクティブ・ラーニング型授業を更に充実させる。これらの取組により、高大接続を意識した生徒の総合的な学力向上を図る。
	スクール・ポリシー（育成を目指す資質・能力に関する方針、教育課程の編成及び実施に関する方針及び入学者の受け入れに関する方針）の策定及び公表	10年間の教育改革に基づき、改めて、本校が育てたい生徒像について話し合いを重ねてグランドデザインを策定した。それを踏まえ、スクール・ポリシー策定した。	A	教職員間の連携を強化し、学校全体としてグラデュエーション・ポリシーを常に意識した指導を心掛けることを通して、大学や社会に出た際に活躍できる人材育成に努める。また、アドミッション・ポリシー意識した生徒募集を行うことで、本校の教育がより一層実りやすい状況を整える。
学校生活への配慮	いじめ防止のための取組	各担当が1学期と2学期に二者面談を実施する中で、学校生活の状況や個々の悩みを確認することによりいじめの早期発見を心掛けた。 7月と12月に三者面談で全校生徒を対象にアンケート調査を実施した。日常では見えない事案を表面化でき初期対応のきっかけにすることができた。 重大事案の発生はなかったが、「いじめ防止対策委員会」を6回開催し、2件のいじめ認定があった。 いじめ以外の生徒間におけるトラブルについては、担任・学年主任が生徒・保護者と	B	いじめが重大事案に発展することなく、最小限に留められるように、早期発見ができる生徒・保護者との関係を築く。 担当が一人で抱えるような状態を作らず、すぐに報告できるような連絡体制をとり、いじめの被害報告を受けた際は初期対応の重要性を意識しながら素早く対応する。 授業担当者から生徒の様子を随時確認し、気になる生徒がいた場合は担任との連絡を密にとる。 スクールカウンセラーとも連携を取り、第三者としてのアドバイスをいただきながら、教職員研修も充実させていく。

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和7年度の取組方策 (Action)
		の対応を行い、解消傾向にある。		
	学校生活の充実とマナーの向上	<p>「これをしたらダメ」というルールの押し付け的な指導から、生徒が自分の判断で適切な行動や姿勢をとっていけるように促す指導に転換していくという方針を継続したうえで、当事者意識を持った生徒を増やすように心掛けた。</p> <p>女子のショートソックスの導入や、文化祭でのスマートフォン使用ルールなどを従来のものから変更する際に、生徒会へアプローチすることで全校生徒からの意見を取り入れながら変更することができた。</p> <p>まだまだ通学マナー（車内・通学路）に関する地元住人からの苦情が寄せられることもある。下校指導など教員の協力を得ながら行っているが、生徒の意識向上が望まれる状況にある。</p>	B	<p>生徒の当事者意識の醸成のために、ルールメイキング・プロジェクトを継続していく。生徒自身でルールの在り方を考え、教職員や保護者等と対話を行いながら検討し、自分たちで学校生活を作っていくという土壌を醸成していく。</p> <p>生徒会や風紀委員会を中心として、マナーや規範遵守の姿勢や行事の運営までできる集団に育てる。</p> <p>校内外での挨拶を更に徹底し、明るく元気な学校を作る。そのためにホームルームや毎回の授業の挨拶を教員が意識して丁寧に行う。</p>
	生徒の自主的・自発的な活動の援助	生徒一人一人が、学校生活に充実感を感じられるような生徒会活動を行うことができた。	A	現状に満足せず、生徒一人一人が主体的かつ意欲的に学校行事に参加する仕組みを作る。
課外活動	母校愛の育成	<p>県総体の応援活動はもとより、県上位の試合においては生徒会が中心となり全校応援を企画し、時には有志を募る形で応援体制を整えることができた。</p> <p>広報部の協力を得て、部活動の記録を積極的に周知することで、母校愛の育成に大きく貢献できた。</p>	A	<p>引き続き、学校全体として仲間を応援する文化を育てるために、生徒会として全校応援や有志による応援を企画する。</p> <p>生徒会主催の表彰式を定期的に行うことで、仲間を称える気持ちを育て、併せて母校の活躍を実感する機会を増やす。</p>
	他分掌との適切な協力	部活動や学校行事において、生徒が全力で取り組めるように、他の分掌と協力をしながら、行事運営等を行うことができた。	A	学校行事や生徒の活動においては、可能な限り生徒を通じて、他分掌に積極的に協力を求めることで、連携することの大切さを生徒に学ばせ、運営を通じて、学校としての一体感を醸成する。
進路指導	日本大学への進学者数増加に向けた取組	<p>入学時よりICTツールを活用し、各学部のオープンキャンパスやイベントの情報や進路メッセージを個人に送信することで、日本大学への意識を高めるよう努めた。また、実際のオープンキャンパスへの参加や体験授業への参加を促し、2年生全員参加の学部訪問を設けるなど、日本大学を身近に感じる機会を与えるように努めた。</p> <p>学習面では、GTZ値（ベネッセ模試）と標準化得点（基礎学力到達度テスト）との相関関係を示すことで、模試のたびに基礎学力</p>	A	<p>令和6年度はセレクション通過率も80%を超え、日本大学進学率が76%を超えてはいるが付属特別選抜の学校枠を余らせている側面があった。令和7年度は、学校枠を可能な限り無駄にしないようにするために、日本大学各学部の説明会を開催するなど、日本大学との高大連携を深め、生徒の日大志向を一層高める。</p> <p>進学率において、日本大学の付属校としての地位を揺るぎないものにする。</p>

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和7年度取組方策 (Action)
		<p>到達度テストを意識させる環境を作った。あわせて、日頃の授業や自宅学習が模試や基礎学力到達度テストにつながるという意識を生徒が持つよう、教員全体で共有して指導に当たった。さらに、内申点を高めることで学校推薦型選抜(附属高等学校等)での進学が叶いやすいことを周知し、基礎学力選抜と附属特別選抜を有効活用するよう指導した。</p> <p>放課後や朝0校時の基礎学力対策講座等を手厚く実施し、基礎学力選抜の通過率の向上を目指した。</p>		
保健衛生	生徒の健康の保持増進	<p>健康診断については、医療法人財団綜友会に委託して実施している。登校時間を学年ごとに設定し待ち時間を減らす工夫をするなど、業者との連携を密にすることで、健診方法や当日の流れを整えた。</p> <p>欠席者に対しては、フォロー日を作成し学校として受診させることに加え、個人的な受診の指示をすることで、受診率100%を保っている。</p> <p>生徒対象のAEDを用いた救命講習は運動部の生徒を中心として、上野原消防署に協力いただき実施した。</p> <p>「保健だより」を適宜作成し、感染症予防や相談室の開室案内、災害共済給付の案内などを行った。</p>	A	<p>令和7年度以降も医療法人財団綜友会と連携を取りながら健康診断を運営していく。また、健康診断受診後の事後措置についても学校が関わる体制を整える。</p> <p>救命講習については、運動部の生徒だけでなく、文化部の生徒や学年ごとに実施できるように検討する。</p> <p>感染症の発生状況などを踏まえて、流行に沿った「保健だより」などの案内を出すことで、感染拡大防止に努める。</p>
	美化意識の向上	<p>美化委員会を中心に文化祭前後の清掃を精力的に行った。文化祭の装飾などでペンキを使うことを止め、教室が汚れないように配慮した。</p> <p>特別教室や教室以外の場所の清掃が行き届いていないことがあった。</p>	B	点検チェック表を作り直し、校内美化に一層努める。
図書	図書室の利用しやすい環境作り	<p>新校舎の完成により、図書室が生徒の生活する校舎から離れてしまったため、新校舎にサテライト図書を創設して新刊を配置した。貸出し、返却も目の前の事務室で行ったが、サテライト図書の利用は一定数にとどまり、図書室の来室者数も減少する結果となった。</p>	B	<p>校内整備事業の進捗にも影響を受けるが、図書室への導線を早めに確保し図書室利用者数の増加を目指す。また、日常の授業において、図書室の有益な活用を呼び掛けることに加え、「図書だより」の充実を通して生徒のサテライト図書や図書室の利用を促す。また、下校時のバスを待つ隙間時間での図書室利用を促すことで、生徒が図書に触れる機会を増やす。</p>

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和7年度の取組方策 (Action)
	HRでの朝読書の定着	新校舎となり生徒の登校が全体的に落ち着いてきたので、校内全体で朝読書に取り組みやすくなった。	A	多くの生徒がHRの中で読書をする習慣が正しく確立されてきたので、サテライト図書室や図書室の利用を紹介しながら、朝読書の継続をサポートする。
	ビブリオバトルの開催	毎年、「アカデミア明誠」の中で実施しているビブリオバトルの参加者が主体的に参加できるように導くことができた。	A	主体的に参加する生徒が多くなるように、早めから募集をかける。また、実施の形態についても、図書委員から意見を募り、生徒が主体的に企画の運営を決定できるように導いていく。
広報	直接訪問による広報	本校について受験生である中学生の認知度や理解を増すために、積極的に中学校での高校説明会に参加した。年間を通じて8校の中学校で説明を行った結果、受験生及び入学者数の増加につながった。また、進学塾訪問の代行サービスを利用して年間延べ300校への訪問を実施し本校の広報活動の充実を図った。	A	全教員による中学校訪問を継続するとともに、中学校で実施される高校説明会にも積極的に参加することで、直接受験生との接点を持つ機会を増やす。 進学塾へのアプローチを強化するために、進学塾訪問の代行サービスを継続していく。
	インターネットによる広報	令和6年度はホームページの効果的な活用について再確認をし、情報を精査しながら、更新頻度を上げた。 またSNS、特にInstagramやXの更新も行い、内外への広報を充実させた。 競合校のホームページ上に表示されるバナー広告を通して、多くの受験生やその保護者に本校の存在をしってもらった。 上記のように校内外への情報提供において利用媒体が多様化した。	A	広報部員による、様々な媒体を利用した情報発信を継続するとともに、より組織的に対応する仕組みをつくる。 SNS運用を業者委託することで、これまで以上に今の時代にあったコンテンツを作成し、情報発信を行っていく。 インターネット広告においては、広告を届けるエリアや年齢などにも狙いを付けて、オンラインの特性を利用した発信をすることで、効果を増大させる。
	紙媒体による広報	新校舎になり、廊下などがホワイトボードになったことで掲示がしやすく、また見てもらえるようになった。 特に令和6年度は部活動に関する発信を強化した。各部活動の情報を年間通してカフェテリアに掲示し、顕著な成績を残した部は号外とし張り出した。生徒たちのモチベーション向上にも寄与している。	A	例年業者に依頼して作成している紙のチラシは作成時期が遅く、印刷した部数を配り切れないこともあったので、より早い時期に作成し各種イベントで配布していく。 自校制作のチラシは学校を訪れてくれた人たちへの広報としては、さほど費用や労力をかけずに配布ができるので、バリエーションをつけつつ、数多く配布していく。
管理運営	安心安全なキャンパスの構築	令和6年4月から新校舎の利用が開始された。ICT教育が新しい設備とともに充実し、生徒の学力向上の一因となった。 カフェテリア、自習室、ミーテングルームなど、生徒が各自の居場所を見つけ、学校生活に活気がでた。 9月には2号校舎の改修が完了して部室及び特別教室の運用が開始されたが、旧本	A	令和7年8月中旬までに旧1号校舎の解体を完了し、渡り廊下の設置を令和8年2月末までに完成させることで、一連のキャンパス整備計画が完了する。

評価項目	取組目標 (Plan)	取組状況 (Do)	達成状況 (Check)	令和7年度の取組方策 (Action)
		館の改修が間に合わずに年度末の改修開始となった。 旧1号校舎の解体は、多少の遅れは生じたが、令和7年度の本格的な解体に向けて進んでいる。		
	<b>新校舎建設に伴う財政管理</b>	新校舎完成に併せて令和6年度に行う予定であった授業料等納付金の改定については、大学本部の方針により改定できなかった。 新入生が、若干ではあるが募集定員を満たさなかったこと、納付金の改定ができなかったことで財政計画の変更を行った。 新校舎の完成と部活動等の実績の紹介、更には入試説明会、中学校訪問や進学塾訪問を通じて、令和7年度の入学生については、募集定員確保を実現した。 令和7年度入学生から、入学申込金を3万円から5万円に引き上げた。	A	授業料等納付金の改定に向けて、引き続き大学本部と調整する。 新校舎の運用開始により、光熱費、施設整備費等の管理を徹底し、引き続き費用削減に取り組む。また、入試委員会をはじめとした各部署が連携し、安定した生徒数確保に向けて、様々な工夫をする。

〔令和6年度の自己点検・評価結果概要〕

新校舎での教育活動は、10年にわたる学校改革の集大成であり、新しい教育活動の創造のスタート地点にもなっている。新しいICT機器を利用して、教員が個々に、時に組織的に「新しい教育活動の創造」のために研修や研さんを積んでいることを高く評価している。また、個々の生徒が自ら考えて行動する力を育てる試みは、ルールメイキング・プロジェクト（生徒による校則見直しプロジェクト）の充実によく表れ、その活動は、全ての生徒の意識改革を補強する流れとなっている。

新校舎及び改修した2号校舎（特別教室及び各部室）での学校生活を通して生徒の活動に活気がでており、文化祭の充実や部活動での成果として具体化されている。そして広報活動や表彰式を通じて、全校生徒と保護者及び教職員が成果を共有することで、母校愛の育成にもつながっている。

新しい校舎の活用という点では、サテライト図書の利用に工夫の余地があり、令和7年度への課題となる。また、新しい教育環境の享受と引換えとなる光熱費の高騰については、これからの本校の課題となる。

〔令和7年度の重点目標〕

令和7年度は、「総合的な探究の時間」のカリキュラムを3年計画で抜本的に整え直す初年度となる。本校では、教育の柱として「総合的な探究の時間」を捉え、「グラデュエーション・ポリシー」を具現化する科目と位置付けた。そして一年間の学習の成果を発表会「アカデミア明誠」で披露する。

「総合的な探究の時間」の運営は、新校舎における教育活動2年目として、ICT機器の利用を含めた施設の有効活用を通して、本校の「新しい教育活動の創造」の要となる。日本大学の付属高校として、「自主創造」の精神を忘れることなく、以下の5点を令和7年度の重点目標とする。

- 1 新しい教育活動を創造する。
- 2 教職員が一体感を持ち，生徒の人間力の育成に当たる。
- 3 各種行事を通して，生徒が自ら考え行動することを促す。
- 4 魅力的な学校生活を実現し，生徒募集の糧とすることで安定した財政状況の維持に努める。
- 5 キャンパス整備計画を完成させる。

以 上